145 Lupus anticoagulant 陽性 SLE 合併妊娠の妊娠維持療法, 特に血漿吸着療法の意義について

順天堂大

○淡路正則, 齊川雄弘, 中村 靖, 武内裕之,
宮崎亮一郎, 吉田幸洋, 橋本武次, 高田道夫

[目的] Lupus anticoagulant (LAC) はリン脂質に対する一種の自己抗体であり, 血栓症や習慣流産と関係が深い。近年, その作用機序も明らかにされつつあり, 陽性例に対する妊娠維持を目的とした治療法もいろいろ試みられている。今回われわれは LAC 陽性 SLE 合併妊娠例にステロイドとアスピリン (ASP) の併用療法に加え, 血漿吸着療法を実施し, 治療の有効性について検討した。

[方法] 当科で妊娠管理を行った SLE 合併妊娠のうち, LAC 陽性と判定した 9 例を対象とした。LAC の判定は 1/5 に希釈したカオリン試薬を用いた APTT 法で, 患者血漿に正常血漿を 1:1 に添加しても補正されず, 正常対照の 1.2 倍以上に延長した場合を陽性とした。9 例のうち初妊婦は 2 例で, 7 例は過去に 1 回から 7 回の自然流産ないし子宮内胎児死亡の既往があった。ステロイドとしてはプレドニゾロン (PSL) 10-30mg/日を, ASP は 80-100mg/日の少量を持続投与した。血漿吸着療法は, 抗リン脂質抗体が陰性荷電による非特異的結合ながらデキストラン硫酸をリガンドとするカラムにより結合除去されることを利用したものである。

[成績] PSL 治療のみを行った 2 例は妊娠 24 週と, 妊娠 27 週で子宮内胎児死亡となった。PSL に ASP の併用投与を行った 3 例のうち 1 例で生児を得ることができたが, この例は分娩後に重篤な多臓器血栓症を併発した。一方, PSL 投与に血漿吸着療法を行った 1 例と, PSL・ASP の併用投与に血漿吸着療法を行った 3 例中 2 例で生児を得ることができた。

[結論] LAC 陽性の SLE 合併妊娠の予後は不良であるが, 適切な治療により生児を望みうる。血漿吸着療法は PSL・ASP の併用投与に組み合わせることにより薬剤の減量や, 予後改善に効果がある。

146 硫酸マグネシウム (MgSO₄) の摘出子宮動脈および妊婦血小板におよぼす影響

鈴鹿回生病院, 国立津病院*, 三重大**

金丸恵子, 松本隆史*, 沢木泰仁*, 伊東雅純*,
柳瀬 仁**, 杉山陽一**

[目的] 子癇発作の治療薬である MgSO₄ は, 血管拡張作用や抗凝固作用など, 多彩な薬理作用を有する薬剤として注目されている。そこで, 本研究では, MgSO₄ の母体循環系における作用を, 摘出血管と血小板を用いた in-vitro 実験により検討したので報告する。[方法] 子宮筋腫のため摘出された子宮 (n=12) より得られた子宮動脈と, 妊娠末期の正常妊婦 (n=15) の肘静脈血を対象とした。子宮動脈は摘出後直ちにらせん状標本を作製し, O₂ 供給下の 37°C krebs 液内で血管の等尺性張力を記録した。また, 肘静脈血から多血小板血漿 (PRP) を分離し, 血小板数を 30×10⁴/μl に調節後, 血小板凝集系の実験に供した。凝集惹起剤として, ADP, collagen, adrenaline, ristocetin を使用した。[成績] 静止張力 0.5g のもとで, ヒト子宮動脈に対する細胞外 Mg²⁺ 濃度を 1.2mM から 0mM に急激に除去すると, 対照群に比べ, 著しい圧の上昇を認められた。また逆に細胞外 Mg²⁺ 濃度を 0mM から 2.4mM に増加することにより, 静止張力は対照群に比較して濃度依存的に低下した。一方, PRP に MgSO₄ を preincubation し, 血小板凝集能を測定した。その結果, 最大凝集率からみると, ADP と adrenaline 凝集では対照群 (10% 糖液) の 38.0±6.6, 67.2±3.6 (%) に比べ, 2.8±1.3, 25.4±10.2 (%) と有意 (p<0.01) に低下した。また collagen, ristocetin にても軽度の凝集抑制が認められた。[結論] MgSO₄ の有する薬理作用の中で, 血管平滑筋の収縮抑制作用や血小板凝集抑制作用は常に Ca²⁺ との関連で考慮されねばならないが, 今回の成績は PIH における循環系改善策としての有用性を示唆するものである。